

インターネット俳誌／SEIGETU

清月

1月中の出句 17名 延べ551句



第162号 平成26年 1月

初春のお慶びを申し上げます

すばらしい一年になりますようお祈り申し上げます

本年もどうぞよろしく御願いたします

平成二六年 元旦

清月庵主 野田ゆたか

福引

野田ゆたか

福引の騒ぎはしやげる大当り
余生なほ自在に生きて齋粥
洛陽に通りづくしの手毬唄
五輪聖火来る初夢に目覚めたる
書初の筆を汚して自戒の句

雑詠

ゆたか選

(太字は秀句)

五感まで研ぎ澄まされて寒の月 大阪 木村宏一
幸せが一目膨らみ日脚伸ぶ 同
山眠る微かに滝の寢息かな二上山にて 同
乾杯の笑顔弾けて今朝の春 同
日脚伸ぶ珈琲タイム生れけり 同
語り継ぐ寒満月の激震地 岡山 橋本幹夫
鞍外す真夜の厩舎や嫁が君 同
雪兎盆に残れる目が二つ 同
綱曳のアンカーマンの肩に綱 同
風花の高崎山の別れかな 同

枝垂れたる庭の要の木に冬芽 愛知 足立山溪
 雪搔て門辺に子等を待ちにけり 同
 鍋釜の出しつ放しや女正月 同
 冴返る 拝殿の床輝きて 同
 夫婦岩にどんと砕くる冬の波 同
 グランドの球児整列日脚伸ぶ 吹田 池下よし子
 パック詰めその名けふより寒卵 同
 つつがなく三種の持葉去年今年 同
 炒りあげて鯛のそぼろや寒土用 同
 三線のいよよ佳境や女正月 同
 缶蹴れば乾きたる音冬ざるる 岐阜 石崎そうびん
 枯野道郵便バイクひた走る 同
 冬夕焼最終便の影消えて 同

冬ざれや揚げ舟の底干からびて 岐阜 石崎そうびん
 探梅や丘の斜面の古陶片 同
 注連貫ふ門に元気な子等の声 千葉 清水恵山
 健やかに一家揃ひて福茶かな 同
 七日目も無事に過して松納 同
 賀客なる孫等の靴のカラフルに 同
 氏神を恵方と決めて詣でけり 同
 冬菫咲く日溜りに歩を休め 千葉 筒井省司
 午後の陽を捉え息づく冬木の芽 同
 焦げ餅をかじった昔どんど焼 同
 ファミレスのメニュー楽しむ三日かな 同
 ミニ菜園残り五本の大根引く 同
 風穴が開いてどんと火が上がる 千葉 田村公平

船靈に柏手を打ち漁始 千葉 田村公平
鍵束を探る指先悴める 同
這い這いの子に靴選び春を待つ 同
継ぎあてのバックネットや冬ざるる 同
意地張つて顔をなさざる福笑 静岡 渡邊春生
居眠りをしばらくしたり初湯殿 同
産土の森の暗がり淑氣満つ 同
食したることに始まる初日記 同
人日や一両電車満員に 三重 山口美琴
白銀の峰染ゆくや冬夕日 同
寄せ植ゑの葉牡丹広き座を占めて 同
水仙や遅れ咲きして葉隠れに 同
ゆつくりと櫂かき回し寒造 三重 後藤允孝

くれないの彩り深め寒椿 三重 後藤允孝
寒月や風の尖りて頬をうち 同
本堂の四隅に暗き寒灯下 同
寒雀一羽飛び二羽みんな飛ぶ 大阪 山縣伸義
近況をペンで書き足す賀状かな 同
はきはきと幼の声や初電話 同
つくばひの底の透けたる寒の水 同
逸る気を蜜柑一つで逸らしけり 愛知 駒田暉風
気遣いし友の賀状が今届く 同
独り旅夜汽車の席で蜜柑剥く 同
八ヶ岳巒の奥まで冬夕焼 山梨 志村万香
初暦こころの内も輝きぬ 同
鴨つくる水の輪ふたつ重なりて 大阪 森戸しゅじ

杖の先ゆるキヤラ揺れて春近し 大阪 森戸しゆじ
霜焼が一進一退繰り返す 愛媛 石川順一
大ききの違いあり過ぎ自家蜜柑 同



寸感

ゆたか

五感まで研ぎ澄まされて寒の月 宏一
高度が高く且つ空気が乾燥していて青白
く研ぎ澄まされたように感じる寒の月。
月光で五感まで研ぎ澄まされたと感じら
れた詩心に敬意。

寒の月の季題がぴったり。

語り継ぐ寒満月の激震地 幹夫

平成七年の阪神・淡路の大震災の未明の
の空に寒月があつた。

この震災を知らない人も増え記憶が風化
しつつあることが否めない。

語り継ぐが句によく馴染んでいる。

枝垂れたる庭の要の木に冬芽 山溪

枝垂梅でしょう。

咲いて庭の要の地位を占める様子を想像
されている作者。

春を待つ気持ちまでが伝わってきます。
作句を楽しんでおられる作者。

グラントの球児整列日脚伸ばす よし子
大会を目指して練習に声を出し合っ
て励む球児ら。

日没と共に終わる練習も僅かづつではあ
るが時刻が遅くなつてゆく。

日脚伸ばすがよく利いている。

缶蹴れば乾きたる音冬ざる そうびん

缶蹴と冬ざれば、できすぎた取り合わせ。
できすぎた取合せは、時に平凡な句にな
るが「乾きたる音」で非凡な作者ならば

の句にでき上がった。
中七がよく働いている。

注連貫ふ門に元氣な子等の声 恵山

左義長で焼く門松や注連飾を貰いに来る
子ら。

飾に添えて餅や祝儀なども貰い左義長で
餅を焼いて食べたり振り振る舞ったりする。

無駄な言葉が無く省略が効いている。

共感一〇句

橋本幹夫選

悴める稜線歩く風の鞭 木村宏一
枝垂れたる庭の要の木に冬芽 足立山溪
煮凝の箸に遊べる琥珀かな 池下よし子
ヒーローの面買ひし児のお年玉 山口美琴
長靴をめがけ飛びくる雪礫 清水恵山
朝採りの大根昼餉の膳にのる 筒井省司
魚群追い南氷洋に年酒酌む 田村公平
風立ちて風花山に帰しけり 渡邊春生
寒風や寄せくる怒涛竜飛崎 後藤允孝
炊飯の湯気に音ある寒の朝 山縣伸義

共感一〇句

山縣伸義選

五感まで研ぎ澄まされて寒の月 木村宏一
逸る気を蜜柑一つで逸らしけり 駒田暉風
枯野道郵便バイクひた走る 石崎そうびん
放たれて真っ直ぐに立つ独楽の芯 橋本幹夫
生返事ふたことみこと蜜柑むく 池下よし子
人日や一両電車満員に 山口美琴
健やかに一家揃ひて福茶かな 清水恵山
元旦や少しの酒に餅二つ 筒井省司
意地張って顔をなさざる福笑 渡邊春生
破魔矢持つ振袖姿慎ましや 後藤允孝

共感一〇句

清水恵山 選

缶蹴れば乾きたる音冬ざる 石崎そうびん
初夢の続きが詰る枕かな 橋本幹夫
八ヶ岳襷の奥まで冬夕焼 志村万香
雪搔て門辺に子等を待ちにけり 足立山溪
パツク詰めその名けふより寒卵 池下よし子
白銀の眩しき連峰冬日さす 山口美琴
道草のお喋り仲間春隣 田村公平
風立ちて風花山に帰しけり 渡邊春生
本堂の仏もふるふ寒さかな 後藤允孝
数の子を噛む音はじけ恙なし 山形伸義

共感一〇句

池下よし子 選

初春や岩場の松を祝いけり 木村宏一
耳奥に鐘の音かすか去年今年 石崎そうびん
鞍外す真夜の厩舎や嫁が君 橋本幹夫
八ヶ岳襷の奥まで冬夕焼 志村万香
人日や一両電車満員に 山口美琴
大気澄み田に寒天の棚並ぶ 清水恵山
朝採りの大根昼餉の膳にのる 筒井省司
魚群追い南氷洋に年酒酌む 田村公平
待春の日をたつぷりと雑木山 渡邊春生
竹刀振りすり足決めて寒稽古 後藤允孝

共感一〇句

木村宏一 選

鴨つくる水の輪ふたつ重なりて 森戸しゅじ
缶蹴れば乾きたる音冬ざるる 石崎そうびん
語り継ぐ寒満月の激震地 橋本幹夫
パツク詰めその名けふより寒卵 池下よし子
白銀の眩しき連峰冬日さす 山口美琴
農機具を揃へて春を待ちにけり 清水恵山
冬堇一人歩きの山路かな 筒井省司
産土の森の暗がり淑気満つ 渡邊春生
奈良町のゆかしき路地や寒紅梅 後藤允孝
近況をペンで書き足す賀状かな 山縣伸義

共感一〇句

筒井省司 選

いそいそと半額セール三日かな 池下よし子
大寒や底をつきたる塩麴 同
簡単にフリーズドライ七日粥 木村宏一
独り旅夜汽車の席で蜜柑剥く 駒田暉風
ラガーらに青春の風ノーサイド 橋本幹夫
青年の御朱印張や初詣 山口美琴
福引きに胸わくわくと番を待つ 清水恵山
人の日に身の上語るカーラジオ 田村公平
ゆっくりと權かき廻し寒造 佐藤充孝
近況をペンで書き足す賀状かな 山縣伸義

共感一〇句

山口美琴 選

寒菊の咲いて風止む禅の寺 橋本幹夫
初夢の続きが詰る枕かな 同
乾杯の笑顔弾けて今朝の春 木村宏一
缶蹴れば乾きたる音冬ざる 石崎そうびん
くれなるに思ひ秘めたり冬薔薇 池下よし子
平凡と云う幸や小豆粥 清水恵山
寒梅の香り訪ねて一万歩 筒井省司
紫の雲に日矢射る初日の出 田村公平
京町家静けき路地の寒の雨 後藤允孝
炊飯の湯気に音ある寒の朝 山縣伸義

共感一〇句

後藤允孝 選

山眠る微かに滝の寝息かな 木村宏一
気遣いし友の賀状が今届く 駒田暉風
孝打ちし釘に小振の注連飾る 橋本幹夫
銀嶺に焦がれし眺め八ヶ岳 志村万香
山の辺の鴉ひと声寒に入る 池下よし子
雪景色街の汚れを隠しおり 山口美琴
六段の調洩れ来る琴始 清水恵山
布団干陽の温もりを畳み込み 筒井省司
居眠りをしばらくしたり初湯殿 渡邊春生
はきはきと幼の声や初電話 山縣伸義

共感一〇句

足立山溪 選

寒梅の香り訪ねて一万歩 筒井省司
冬菫咲く日溜りに歩を休め 同
枯野道郵便バイクひた走る 石崎そうびん
語り継ぐ寒満月の激震地 橋本幹夫
八ヶ岳巒の奥まで冬夕焼 志村万香
グランドの球児整列日脚伸ぶ 池下よし子
人日や一両電車満員に 山口美琴
貌を埋め凍鶴川に身じろがず 清水恵山
手掴みで撒く寒肥の粒白し 田村公平
近況をペンで書き足す賀状かな 山縣伸義

共感一〇句

森戸しゅじ 選

五感まで研ぎ澄まされて寒の月 木村宏一
山眠る微かに滝の寝息かな 同
開拓の鈴音高き櫓の馬 橋本幹夫
猫と居る小雨降る夜の四温かな 同
大気澄み田に寒天の棚並ぶ 清水恵山
農機具を揃へて春を待ちにけり 同
捨て窯の焚き口暗し雪催 石崎そうびん
大屋根の雨やはらかし春隣 池下よし子
元朝に早やほぐされし睨み鯛 田村公平
つくばひの底の透けたる寒の水 山縣伸義

俳句用語備忘録

編集子

〔運座〕数人が集まり席題によって句を詠み選をする方法。

〔花鳥諷詠〕高濱虚子による造語。伝統俳句派の基本理念。花鳥風月をを諷詠することで、自然界の現象、それに伴う人事界の現象をありのまま諷詠することにある。俳諧師以来の俳句的神髄を取り出したとも。

〔客観写生〕虚子の用いた俳句作句における方法論。俳句はその作において主観描写を廃し客観の裏側に余韻として述べ、客観と主観の渾然とする境地まで達するという思想。

〔季題〕季節に関する題目。単なる四季の詞としての季語に対し「古今集」以来発句に至り当季の題目として必須条件となり、現在も歳時記を中心としてとりまとめている。俳諧においては季題を詠むという俳句作りが伝統的となっている。

〔季重なり〕季題が一句の中に二つ以上在ること。通常は良いこととされない。

〔切れ字〕発句が独立性を持ったために句末や句中に用いた切れの働きのある助詞・助動詞のこと。切れ字事一八字とも呼ばれ、かな、けり、もがな、らん、し、ぞ、か、よ、せ、や、つ、れ、ぬ、ず、に、へ、け、じ。など。

特にや、かな、けりが有名。強調と省略にその意義がある。

〔吟行〕俳句を作るために実景を見に、季題と出会うため外へ出て行くこと。

〔句またがり〕読みが五七五音でなく、他の文節にまたがっている、七五五のような句。

インターネット俳句 清月
第162号
平成26年1月中の出句から

発行
平成26年 2月20日

主宰 兼 編集
野田ゆたか

発行所
枚方市 大阪清月庵

清月俳句会のホームページ
[https://haiku575.info/seigetukai/
home/homu.htm](https://haiku575.info/seigetukai/home/homu.htm)